

雜信一束

芥川龍之介

青空文庫

一 欧羅巴的漢口

この水たまりに映っている英吉利の国旗あざやかの鮮さ、——おつと、
チエエズ車子にぶつかるどころだった。

二 支那的漢口

彩票や麻雀マアジャン戲の道具の間に西日の赤あかとさした砂利道。其
 処をひとり歩きながら、ふとヘルメット帽の庇の下に漢ハンカオ口の夏
 を感じたのは、——

ひと籃かごの暑さ照りけり巴旦杏

三 黄鶴楼

甘棠酒茶楼かんとうしゅちやろう と言う赤煉瓦の茶館、
惟精顕真楼いせいけんしんろう と言うやは

り赤煉瓦の写真館、——その外には何も見るものはない。尤も代
赭色の揚子江は目の下に並んだ瓦屋根の向うに浪だけ白じらひらめと閃
かせている。長江の向うには大別山、山の頂には樹が二三本、そ
れから小さい白壁の禹廟うびよう、……

僕——鸚鵡洲おうむしゅうは？

宇都宮さん——あの左手に見えるのがそうです。尤も今は殺風景な材木置場になっていますが。

四 古琴台

前髪を垂れた小妓が一人、桃色の扇をかざしながら、月湖に面した欄干の前に曇天の水を眺めている。疎まばらな蘆はすや蓮の向うに黒ぐろと光った曇天の水を。

五 洞庭湖

洞庭湖は湖とは言ふものの、いつも水のある次第ではない。夏以外は唯泥田の中に川が一すじあるだけである。——と言ふことを立証するように三尺ばかり水面を抜いた、枯枝の多い一本の黒松。

六 長沙

往來に死刑の行われる町、チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞える町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいきれる町、鶏さえ僕を脅すように「アクタガワサアン！」ととき鬨をつくる町、

……

七 学校

長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を参観。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰う。女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使わないから、机の上に筆硯を具え、幾何や代数をやっている始末だ。次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰うと、教師愈いよいよ仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達もここの寄宿舎へは兵卒が五六人ちんにゆ闖ちん入うし、強姦事件を惹き起した後ですから！」

八 京漢鐵道

どうもこの寢台車の戸に鍵をかけただけでは不安心だな。トランクも次手に凭もたせかけて置こう。さあ、これで土匪どひに遇つても、——待てよ。土匪に遇つた時にはティップをやらなくつても好いものかしら？

九 鄭州

大きい街頭の柳の枝に辮髪が二すじぶら下っている。その又辮髪は二すじとも丁度南京玉を貫いたように無数の青蠅を綴つてい

る。腐って落ちた罪人の首は犬でも食ってしまったのかも知れない。

十 洛陽

モハメツト教の客棧の窓は古い卍字の窓格子の向うにレモン色の空を覗かせている。夥しい麦ほこりに暮れかかった空を。

麦ほこりかかる童子の眠りかな

十一 龍門

黒光りに光った壁の上に未に仏を恭敬くぎようしている唐朝の男女の
端麗さ！

十一 黄河

汽車の黄河を渡る間に僕の受用したものを挙げれば、茶が二椀、
棗なつめが六顆、前門チエンメンはい牌の巻煙草が三本、カアライルの「仏蘭西革
命史」が二頁半、それから——蠅を十一匹殺した！

十三 北京

いらか
葺の黄色い紫禁城を繞った合歡ねむえんじゆや槐えんじゆの大森林、——誰だ、この
森林を都会だなどと言うのは？

十四 前門

僕——おや、飛行機が飛んでいる。存外君はハイカラだね？
北京——どう致しまして。ちよつとこの前チエンメン門を御覧下さい。

十五 監獄

京師第二監獄を參觀。無期徒刑の囚人が一人、玩具の人力車を拵えていた。

十六 万里の長城

居庸関きよようかん、だんきんきよう 弹琴峽等を一見せる後、万里の長城へ登り候ところ、乞食童子一人、我等の跡を追いつつ、蒼茫たる山巒さんらんを指して、「蒙古！ 蒙古！」と申し候。然れどもその偽いつわりなるは地図を按ずるまでも無之候。一片の銅錢を得んが為に我等の十八史略的ロマン主義を利用するところ、まことに老大国の乞食たるに愧はじず、大いに敬服仕り候。但し城壁の間にはエエデル・ワイズの

花なども相見え、如何にも寨外さいがいへ参りたるらしき心もちだけは致し候。

十七 石仏寺

芸術的エネルギーの洪水の中から石の蓮華が何本も歡喜の声を放っている。その声を聞いているだけでも、——どうもこれは命がけだ。ちよつと一息つかせてくれ給え。

十八 天津

僕——こう言う西洋風の町を歩いていると、妙に郷愁を感じますね。

西村さん——お子さんはまだお一人ですか？

僕——いや、日本へじゃありません。北京へ帰りたくないのですよ。

十九 奉天

丁度日の暮の停車場に日本人が四五十人歩いているのを見た時、僕はもう少しで黄禍論に賛成してしまう所だった。

二十 南満鉄道

高^{カオリ}梁^{ヤン}の根を葡^はう一匹の百足^{むかで}。

青空文庫情報

底本：「上海游記・江南游記」講談社文芸文庫、講談社

2001（平成13）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第十二巻」岩波書店

1996（平成8）年10月9日発行

入力：門田裕志

校正：岡山勝美

2015年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

雑信一束

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>